この面を内側にして二つ折り

合格体験記

野球漬けの高校生活から１年で共通テスト198点へ！

早稲田 立教 法政 合格

３科目で 223点→431点に UP　森下 晃熙

２月下旬。森下の受験は終わった。全て不合格、当たり前の結果であった。野球部で練習、試合の日々に明け暮れ、勉強ができる時間はほとんどなかった。引退してから勉強を開始したが、単語は覚えられず、日本史は江戸時代で勉強がとまってしまった。森下の夢や将来はまだ漠然としていたがはっきりした目標は早稲田大学に進学することだった。小学校の時から野球をやっていたので、ＴＶで甲子園や６大学野球を見ていたときに、特に早稲田大学の選手がかっこよく見えたという。今度こそは絶対合格する！森下の意志は一度失敗しても消えることはなかった。彼の予備校選びは高校生の時に持っていた参考書のほとんどが東進の講師が書いた本で身近に感じたことからすぐ東進に決めた。

４月から受講を開始。どの科目も基礎講座からスタート。文法講座を終え構文講座へ進むと森下の英語の世界観がガラリと変わった。「今まで単語と熟語をつなぎ合わせて読んでいた自分が恥ずかしくなりました。この授業で英文の構造理解ができるようになり、正確な意味をつかめました。」森下は構文の授業をさらに進め、復習も徹底、どんどん読めるようになることが勉強を楽しくさせた。その結果が６月の模試であらわれる。４月で１０２点だった英語が１５４点、一気に５２点も上げた。現代文も授業で論理的な思考が身に付き、１００点満点中８３点を記録。

しかし森下は「この６月の模試で成果は出たのは良かったのですが、昼ごはんを一緒に食べているＹくんに国語、日本史は負けて合計得点でも負けて悔しかった。」と面談時に語った。ここから勉強時間はさらに増えるものの成績は８月の模試で英語を下げ、国語は１４６点と微増、日本史は７０点を突破した程度の結果になる。

ある日の面談「英語がだいぶ下がったけど原因は？」と担任が森下に問いかけると「４～６の図表問題やイラスト、長文の失点が多いです。時間が足りず、字面を追っているだけというか…。焦って内容が入らなくて。」と答える。「じゃあその原因はなんだと思う？」と再度、森下に問う。担任はある程度その原因は分かったがあえて自分から答えない。考える時間を与える。「…音読ですか？」と森下。担任は頷く。「構文に意識が集中しすぎて左から右の読んでいく直読直解の意識が薄れて、スピードも遅くなったんだと思います。きれいな正確な訳を求め過ぎて時間の意識も欠如してました。」と続けた。担任と考えた解決策は今までの構文や長文のテキストを１日２時間音読、それと併行で今受講中のハイレベルの長文の音読もすることだ。その日から音読を開始。音読をしすぎて声がかすれ喉を痛めた日があったが、それでも続け１０月の終わりの模試で英語は１９８点、時間も１０分以上余って見直しもできた。

１１月、早稲田の過去問演習講座を９月から２学部を１０年分解ききった状態ではあったがもう１周する計画を立てた。正答率を担任と分析すると英語はいつも合格点をオーバーしていたが日本史が合格点に届かず、過去問演習講座の解説授業と早慶日本史演習のダブル受講で落としてはいけない問題、差がつく問題の攻略、知識の定着に努めた。また立教、法政も過去問を解いていき、分からない部分は担任に聞いて解決をした。共通テスト１週間前までは早稲田、立教、法政対策でギッチリ詰め込み、共通テストにはそこまで重点は置かず、試験終了当日にすぐ私大対策に切り替えた。小学校の時から夢だった早稲田の学生にもう少しでなれる、その想いが勉強の原動力だった。

結果、早稲田、立教、法政合格「夢がなんとか叶いました。夢の続きなんですけど勉強してて英語の先生になりたいと思います。あと野球部の顧問です」と森下は目を輝かせながら未来を語った。

スモールステップで物理を一から勉強。

電気通信大 法政 合格！

物理を一から始めて９割超えへ　増井 洋平

「受かりましたよ。」

いつもクールであまり感情を表に出さない増井が、少しだけ興奮していた。電気通信大学合格！それが興奮の理由だった。

情報通信に関連した仕事につきたい。それが増井の当初からの目標だった。その目標を達成すべく、まだ寒さの残る去年３月、増井は東進の門を叩いた。

「あまり、まよわなかったです。」増井は語る。「担任がしっかり指導してくれる予備校だというのが大きかったです。」「経済的な面や勉強時間の確保をかんがえると、家から近い、のは合格の絶対条件と思いました。」県内にいくつかある予備校の中で東進を選んだ理由を聞くと増井はそう答えた。

ただ、そこにはもうひとつ理由があった。それは他の予備校と違い自分にあった授業を選べる点だった。「自分で講座を選べる事と、自分の理解に応じて進められる点ははずせなかったです。」実は増井は情報通信学部を希望しているにもかかわらず、現役時は理科が生物選択だったのだ。生物で一定の点数は取れつつも、何か違うと感じていた。「生物はやっていて面白くない。何か違う。物理を一からやりたいと思って。入学面談のとき東進なら大丈夫と言われて、これだ！と思いました。」

そう考えた増井は東進の本科生として物理を一から勉強することに決めた。それが出来たのも自分で講座を自由に選べる東進の仕組みがあってこそ、だった。他の予備校ではコースが決まっていてなかなか自分にあったカリキュラムが組めない。自分で見つけた場所で、自分で道を切り開く。増井らしい考え方だった。

校舎では朝、夕のＨＲがあるから、自分のペースを維持しつつ、一日のスケジュール管理がしっかりできる。担任との面談で、時間割を決めて、納得のいくまで受講する。疑問点は遠慮なく、担任にぶつけた。どんな疑問点、質問も聞いて、答えてくれる、担任の存在は大きかった。

彼が続けられた理由がもうひとつあった。増井に聞いてみた。「やっぱり一緒に勉強した本科の友人たちと勉強法をアドバイスしてくれた先生のおかげです。」一人だと心が折れそうになる受験勉強、増井は一人ではなかった。いつも共に勉強に励む友人たちとそれをサポートする担任、そしてそれを見守ってくれる両親の存在が大きかったと増井は言う。

いつも開校時間ぎりぎりいっぱいまで友人と勉強をし続けた増井。受験という高い壁を乗り越えただけでなく、人間としてもこの一年間で大きく成長したに違いない。

大学合格をはたした増井に次の目標を聞いてみた。「いやーまだわかんないですよ。とりあえず学校の授業をきちんと聞いて単位落とさないことかな。」相変わらずクールに語る増井だったが、その表情にはこの一年で得た、確かな自信と充実感があふれていた。

英語 19%→96%　驚異の77%UP

法政大学文学部合格

英語が 38 点→192 点に UP　大熊 泰輔

「スタートが遅かったです。自分が校舎で勉強していると、高校 1 年生からきている生徒さんをみて自分遅かったなー、と心の中でずっと思っていました。」「もう一回先生面倒見てください。よろしくお願いします！」大熊の一度目の受験が終わった時の言葉。３年の夏に東進に通うも半年弱の期間で勉強したが結果は不合格。もう一度、東進で勉強することになった。大熊は予備校選びは全く迷わなかったという。「担任が一生懸命面倒見てくれたのでここがベスト、他の予備校は探さず、すぐ手続きしました。」３月、寒さがまだ残る中、大熊は勉強を再開した。本来、量に勝る勉強はないかもしれない。基本は高速マスターだ。「１週間で３０００。朝～夜まで校舎にいれば絶対終わるから大丈夫だよ。」と担任。「ホントですか？３０００はちょっと…」とすかさず「今いる１，２年生はほぼ終わってるよ」と返す。「負けたくないんでやります！」担任は、負けず嫌いの彼の性格を分かっていたのであえて厳しい目標を設定する。毎日朝 10:00 ～ 22:00 まで。小学校時代から高校までサッカーをやっていたため、体力と根性には少なからず自信がある。そんな要因もあってか大熊は３０００コの単語は５日、熟語も２日で終えた。４月中に高校入門レベルの文法を修了、Ｃ組という入試頻出英文法の授業をも４月中に終わらせた。

５月から英語は長文講座へ。担任の理想通り、大熊の理想通りに勉強が進む。長文は受講したあと、音読を１０回してから次の講に進んだ。どんどん読み込むうちに語彙が定着、また読解のスピードが劇的に変わった。午前中は英語の受講と音読室での音読。担任作成の毎日の単語テストは１～２問ミスするくらいで満点もどんどん記録するようになっていく。基本動作の繰り返し。大熊は担任が言ったことを全て実践していった。

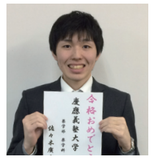
英語は４月９３点、６月１１０点、８月１４３点。8 月の時点で、現役時の３８点から１１０点以上ＵＰさせた。「模試で７０％は今まで一回もとったことないです。中学校でもなかったかな…。勉強で成果が上がったこと自体が、いままであまりなかったので。ホント嬉しいです！」大熊のやる気はさらにヒートアップする。9 月、英語のテキストの音読はずっと徹底していただが、現代文や日本史も受講後音読をするようになる。模試の現代文の点数は４月４８点、６月６４点、８月４８点と７割に届かない成績。模試返却の時の失点分析では現代文の読むスピードが遅いということ、読んでも文章が頭に入らないケースもあるということから、まず授業で習った現代文の文章をしっかり声に出して読む、またこれから受講する現代文も必ず音読、そして文章理解に努める。英語と同じ勉強法を国語でも実践する。さらに日本史も。追加申込をした志望校対策の講座も受講後、必ず音読、高速マスター講座にある長文速読トレーニングも毎日解いた後、音読…。共通テスト当日の結果は英語１８９点、国語現代文７８点、古文３７点、日本史９０点。英語はいままで１９２点が模試でベストだったがプレッシャーに打ち勝ち、それに近い点数は叩き出した。

２ 月、大熊は校舎に法政大学の文学部英文科に合格したことを伝えるために登校した。そして他にも報告があるという。「先生、将来は塾や学校で英語を教える先生になりたいと思っています。点数が悪い生徒の気持ちはめちゃくちゃ分かるんで、先生になってそういう子達を救えたらいいなぁって。」春からは、法政大学のキャンパスで、その夢を追いかけていくだろう。

英・数・化の３科目で共通テスト95%達成！

慶應（薬）北里（薬）合格

共通テスト試験結果 英語195 数ⅠA97 数ⅡBC92 化学95　佐々木 廣大



１回目の受験は全敗。２月に浪人が決定した。大学受験を振り返る・・・。

高校２年の秋に東進に入学した。どの授業も知的感動の連続でつまずいていた数学、化学の成績は半年で共通テストレベル 80%を超えた。しかし共通テスト本番で頭が真っ白になり 70%弱に終わる。そのままズルズル引きずり私大入試も失敗。本番の弱さを痛感する。部活をやっていたことや勉強への取り組みにムラがあったことにも後悔した。

予備校探しをしないといけないと心では思うもなかなか動けない。都内に行くにはムダな通学時間がかかる。電車の中では混雑して勉強はできない。時間がもったいない。いくつもの予備校のＨＰを見るもここがイイ！と思うものはなかった。

ある日、東進のＨＰを見る。体験記が掲載されていたので読んでみると東進で一年過ごすのは意外とありかなと考えはじめた。他の予備校に比べて圧倒的に授業がいいことと２月からでもスタートできることが魅力的に思えた。

数日悩むも、佐々木は２月下旬には東進でスタートを切ることになった。

何をすべきかは明確であった。来る日も来る日も受講＋高速マスター。現役時に完璧には徹底できなかった『テキストの復習』を十周繰り返した。

授業後の数学・物理の質問対応の様子

「同じ問題を解きなおすことで基本フォームが作られ、それが別の問題を解くときにも役に立つ。」と担任にアドバイスされたのでひたすら量をこなした。

共通テスト過去問演習は６月から始め『全科目 10 年 ×2 回＋大問別特訓』を 8 月中に終えることが出来た。その段階で正答率 90%を記録した。

秋冬、志望校対策講座の受講、そして慶應大学の過去問に取り組む。合格最低点ギリギリの点数を１回目で出せた。北里に関しては８割とれた。

いつの間にか佐々木の机にはボロボロになった赤本と青チャート・東進のテキストが積みあがっていた。間違えた問題はそれを解きなおすだけではなく似た問題を赤本・チャートから探し徹底的に解きなおす。佐々木に分からない問題、できない問題はほとんどなくなっていった・・・。

今、佐々木は慶應大学薬学部に通っている。そして過ごしていた東進でアルバイトをしている。「数学と物理の質問はやっぱり多いですね。自分は化学選択だったんで物理はちょっと自信はないんですけど。生徒に教えられるように物理を勉強しています。あと質問に答えるだけでは成績は上がらないので合格する勉強法・伸びる勉強法も日々伝えています。」佐々木を慕っている生徒は多い・・・。